

巻 頭 言

義肢装具士白書編集委員会 理事
新潟医療福祉大学 リハビリテーション学部 義肢装具自立支援学科
講師 佐藤 未希



昨年度より日本義肢装具士協会の理事を拝命し、新たな立場となり戸惑うこともあります。理事や監事、事務局の皆様を支えていただき、少しでも協会活動に貢献したいという思いで取り組んでいます。これまで以上に、業界全体を見渡す視点を持つことの重要性を痛感しています。

私は2001年、17歳のときに交通事故により右大腿切断となりました。多感な時期に、一夜にして足を失うという現実、単に身体機能を失うことだけではありませんでした。昨日まで当たり前だった「歩く」「高校に行く」「将来を思い描く」といった日常が突然途切れ、未来が見えなくなるような深い喪失感と絶望に包まれました。そのような状況の中で出会った義肢装具士は、単に義足を作る人ではありませんでした。「もう一度歩けるかもしれない」「自分もこんな人を支える仕事がしたい」という希望を与えてくれた存在でした。この出会いが、私が義肢装具士を志す原点となっています。

その後、義肢装具士となり、栃木県の協義肢工業株式会社で8年間の臨床業務に従事させていただきました。特発性側弯症や先天性股関節脱臼等の装具療法に携わることも多く、患者さんやご家族から「女性の義肢装具士で安心した」という声をかけていただくことがありました。性別や年齢、さまざまな背景を持つ義肢装具士がいることが、対象者にとって安心感を与える要素になることを学びました。また、私が出産した2009年当時は、女性義肢装具士が子育てと仕事を両立しながら臨床に携わり続けるケースは決して多くありませんでした。それでも、前職では周囲の皆様の温かい理解と支えのもと、臨床経験を積み重ねることができました。その経験は現在の教育や協会活動の礎となっており、心より感謝しております。

2015年からは教育の道に進み、新潟医療福祉大学で教員として学生の育成に携わるようになりました。現在は女子学生も増え、それぞれのライフステージに応じて活躍する卒業生の姿を見るたびに、業界の多様性は着実に広がっていることを実感します。また、大学教員として教育に加え、研究の推進も重要な役割であると感じています。義肢装具分野では対象者数が限られることから、エビデンスの蓄積が容易ではない現状があります。一方で、多施設での共同研究や教育機関・医療機関・企業との連携を通じて、より質の高いエビデンスを創出し、それを社会へ還元していくことが、今後ますます求められると感じています。

職業としての多様性は広がりつつありますが、その一方で業界全体の“担い手不足”という大きな課題に直面しています。文部科学省によると18歳人口が平成初期の約200万人から2040年には88万人に半減すると推計されています。それに対し、大学入学者数は平成初期の47万人から、現在では63万人に増加しており、これまでは進学率の上昇が人口の減少を補ってきました。しかし、今後は進学率の上昇だけでは人口減少を補うことが難しい局面に突入し、こうした影響は、義肢装具士養成校にも及んでいます。かつて10校11コースあった養成校は現在、8校に減少し、総定員も90名減少しました。それに伴い、国家試験の合格者数は、ピーク時の2015年の238名から、昨年は150名まで減少しています。一方で、直近5年間の求人倍率（求人総数ベース）は2.25倍と高く、義肢装具士の不足は深刻な現状にあります。

この課題に対し、「協会として何ができるのか」「教育者として何ができるのか」「理事として何をを目指すのか」その明確な答えを、私はまだ見出せていません。しかし、だからこそ多くの先輩方や仲間と共に考え、行動し続けていきたいと思っています。私の置かれた、義足ユーザー・女性義肢装具士・教育者・協会理事という立場は常に「少数派」ですが、多数派ではないからこそ見える課題や、得られた学びも多くありました。立場が変わるたびに見える景色は異なりましたが、一貫して変わらない想いがあります。それは、「義肢装具は対象者の生活に欠かすことのできない存在であり、その一つひとつを通して人生に寄り添うことができる義肢装具士という職業は、社会にとって極めて重要であり、誇りある専門職である」ということです。このような職業に携わり続けられていることに深く感謝すると共に、その魅力と価値を次世代へ繋いでいくことが、私に与えられた使命の一つであると考えています。

結びに、本誌が臨床・教育・研究の知見を共有し、義肢装具士一人ひとりの学びと成長につながる場であり続けることを願っております。これまでに経験した学びを生かし、微力ではありますが、本協会および義肢装具業界の発展に貢献できるよう努めてまいります。そして、義肢装具を必要とする全ての方が、その人らしい生活を安心して送ることができ、次世代の義肢装具士が誇りと希望を持って活躍できる未来を、会員の皆様と共に築いていければ幸いです。